

人類と地球の平和的共存を目指して

人口と開発

Population & Development

春

APR/1997

No. 59

財団法人 アジア人口・開発協会 (APDA)



巻頭言／第13回APDA会議を終えて

黒田 俊夫 3

第13回人口と開発アジア国會議員代表者会議開く

4

○講演・質疑応答——黒田俊夫博士⁷／川野重任博士¹¹

内嶋善兵衛宮崎公立大文学部長¹⁷

Ⅱ会議二日目Ⅱボー・トン・ズアン・ベトナム国會議員²⁰

小川康恭慈恵会医大助教授²⁴

○スピーチ——中国の人口・水資源・開発 ハオ・イ・チュン²⁸

○スライド——二〇二五年への決断—アジアの人口増加と食

料³¹

■開会式のご挨拶——前田福三郎(助)APDA理事長³⁷

笹山幸俊神戸市長³⁹／桜井新AFPPD議長⁴⁰

中山太郎国際人口問題議員懇談会長⁴²／ナフィス・

サディックUNFPA事務局長⁴⁴

■閉会式のご挨拶——V・T・パラニIPPPE東・東南アジア

太平洋地域局長⁴⁶

○第13回人口と開発に関するアジア国會議員代表者会議・参加

国他⁴⁷

スピーディな復興に感動——阪神・淡路大震災復興支援館を訪問 48

中国における人口流動化と社会変動

インドネシア共和国・西ジャワ州への工場進出と食糧生産

空気は変わるか——百家争鳴の「改革」論議

佐々井司 50
隅田裕明 57
森 一久 64

にゅーすふぉーらむ

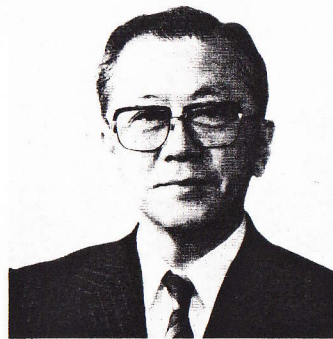
66

出生数2年ぶり増加／新国際機関で食
料備蓄／新成人一八二万人3年連続
減／二〇五一年に1億人割れ／人口減
少社会、細る活力／人口減少社会へ対
応急げ／65歳以上、3割が独居／環境
脅威論に中国反発／人口抑制、お国の

事情／飽食がまねく自給率低下／国連
人口賞に黒田俊夫氏／中国の食料需要
増大／国連に環境保全理事会を／足る
を知り、知恵を使い／堂本議員・国連
から表彰／新定義Ⅱ70歳以上高齢者／
APDA会議、神戸で開幕／その他

「空気」は変わるか

——百家争鳴の「改革」論議



森 一久

(社)日本原子力産業会議副会長
(財)アジア人口・開発協会理事

世はまさに「改革」の時代。いわく行政改革、財政改革、税制改革、そして教育改革、それに福祉の改革……、まさに「改革」の大合唱である。

さて、このような「抜本的」改革やむなし、と皆が思うようになってきた対象(あるいは標的)はすべて、実は戦後国民みんなで作り上げて来たものばかりである。このことは、国会の先生方から庶民の皆さんまで、胸に手を置いて考えれば思い当たることばかりであり、一々その責任を詮索するのも野暮というものであろう。肥大化した縄張り争いに明け暮れる官僚機構、過剰と言われる規制行政にしても、政府にお

ねだり乃至その権威にあやかりたい人々(グループ)と、そのための制度・予算に奔走した政府・国会の関係者との、合作物の集大成である。言ってみれば、どれもこれも、故山本七平氏言うところの「空気」の成せる業(ごう)ばかりといえようか。

一方で、世の中がこうも複雑怪奇になってくると、誰もが放置できぬと思うほどの、衝撃的な事件が持ち上がった。とっさには、それが生じた所因ないし因果関係がそう簡単には見えてこないものも少なくない。例えば、「いじめ」とそれにまつわる悲惨な出来事の続発、あるいは奇烈な受験競争と

社会問題に不祥事。「オウム事件」もそうだが、世間はいつも、衝撃的な出来事に遭遇すると、決まって手近なところから「犯人探し」を始める。この場合、学校の先生の怠慢、父兄の無関心等々がやり玉に上がり、文部省への批判に発展したのち、更に事態への省察が深まるにつれて、根はもっと深いことに気づき、直接の対策とあわせ、他の事態(人材確保等)への要請と相まって、「教育改革」へと世論が展開していったようにみえる。しかし、「いじめ」や受験地獄の問題の解決を、「教育」の枠のなかにもとめるのは、正に望外の愚に等しいことではないだろうか。紙数の関係で詳細はできないが、一言でいうなら、この問題の背後には、現代日本の企業と社会のかかえる矛盾のすべてが係わっているものと思われる。

さて「改革」の大部分は、教育や福祉

のような国内中心のものを除き、国際化に伴う「外圧」から始まっている。前述のように、「改革」の対象の全ては、それぞれその時々「空気」によって出来上がったもの。つまり「空気」が変わらねば、何も変わらないわけであるが、どの「改革」にもそれぞれ受益者と被害者が続出するのは避けがたいことは明らかな。あの、文字通り「崖っぷち」と国民皆が思った、五十年前の敗戦時とちがいに、「金持ち日本」などと煽てられ、頭打ちとはいってもまだまだヌルマ湯の経済環境、国・国民のアイデンティティも乏しいこの横並び社会で、果たしていろいろな「空気」の入れ換えがどの程度出来るものか、まことに心許ない。いや「改革」不成立の場合、どんなになっても、そのツケは国民全てが負えばいいのだ、と開き直ることもできよう。しかし、事態はそんなに簡単ではない。

「改革」の多くが外圧から始まったの

は止むを得ないとしても、解決策のお手本がまた直輸入で、自分の頭で考えたものがあまり見当たらないのが気になる。古来日本は、外来の思想や制度を独特の仕方では消化吸収し、今日の文化を形成してきた。見てみるとその外来の材料の多くは、文字通り換骨奪胎され、名は同じでも中身はすっかり変質しているのが多いことは、周知の通りである。

ことが料理や風俗、さらに宗教や哲学くらいまでなら、本家本元も、日本民族の「趣味」として看過してくれ、場合によっては過分の評価さえも受けてきたわけであるが、国際的に衆人監視の中で行われようとしている、今回の「改革」は、昔なら戦争にもなりかねない緊張を背景にするだけに、もし同じ「手口」と受け取られる時、これは、取り返しのつかない、真の国際的孤立を招きかねない、と憂いの増すこの頃である。